基礎ゼミナールの授業評価アンケート結果の考察

基礎ゼミナール部会長、都市環境学部准教授

小根山　裕之

はじめに

「基礎ゼミナール」は、「考える・調べる・発表（表現）する」といった、より積極的で能動的な学習姿勢と、課題発見、問題解決能力の養成を目的とした、少人数（最大1クラス当たり24名）によるゼミナール形式の授業である。1年前期に受講する必修科目であり、今年度は受講学生1,699名に対して79クラス開講した。本稿では、FD委員会と教務委員会基礎教育部会が実施した「21年度前期基礎ゼミナールの授業評価アンケート結果」について、その概要を紹介する。

調査対象と回収率

受講学生と担当教員の両方を調査対象とした。以下、学生による授業評価をSE、教員による授業評価をTEという。SEでは、受講学生1,699名に対して1,381名（回収率81.3％）、TEでは、担当教員79名に対して68名（回収率86.1％）の回答があった。

質問項目

12問の質問項目を設定した。質問項目を表1に示す。うち、第1問～第8問については共通事項として他の教養科目と同じ設問であり、第9問～第12問は個別事項として基礎ゼミナール独自に設定した設問である。個別事項としては、基礎ゼミナールの目標である、問題発見・解決能力（問10）とプレゼンテーション能力（問11）の達成度に関する設問を設定した。また、基礎ゼミナールは人数の制約上必ずしも希望のクラスを受講できない場合もあることを踏まえ、テーマに対する関心（問9）の設問を設定した。その他、教員の解説と受講生が実際に自ら活動する時間のバランス（問12）を確認した。

回答結果の考察

まず、学生の満足度に注目すると、SEの【満足】（この授業を受講して満足した）について高評価（回答が5：強くそう思う、4：そう思う、の合計。以下同じ）の比率は、68.7％であった。また、SEの【態度】（この授業に意欲的・積極的に取り組んだ）の高評価は71.6％であった。いずれも、他の講義科目との比較では高水準であり、自らが主体的に参加するゼミナールならではの特徴と言える。ただ、昨年度を見ると【満足】は75.7％、【態度】は81.1％であり、ここ数年いずれも改善してきているのに反して、今年度は大きく下がっている。

その他の項目では、【対応】（教員は学生の意見・質問に対して適切に対応した）について、高評価が

表1　質問項目及び略称

質問項目			略称
共通事項	問1	私はこの授業に意欲的･積極的に取り組んだ。	【態度】
	問2	授業の目的を意識しながら学習することができた。	【意識】
	問3	教員の説明はわかりやすかった。	【説明】
	問4	教員は学生の質問･意見に対して適切に対応していた。	【対応】
	問5	授業時間外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？	【時間】
	問6	成績評価方法について十分な説明があった。	【成績】
	問7	シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できた。	【成果】
	問8	私はこの授業を受講して満足した。	【満足】
個別事項	問9	SE　この授業テーマは自分の関心にあっていた。	【主題設定】
		TE　この授業で学生がテーマに関心を持つように教えた。	
	問10	問題発見と、その解決に向けた取り組み姿勢の重要性を認識した。	【問題発見】
	問11	ディスカッションやプレゼンテーションなどの自己表現能力を向上させることができた。	【表現能力】
	問12	受講生による議論･調査･発表の部分に対し教員によるテーマの解説部分の時間配分はどうでしたか？	【バランス】

75.2％であった。しかし、昨年度の85.2％と比較すると大幅に低下している。

上記の通り、昨年度との比較では高評価の比率が下がっている項目が多い。これらの年度別比較は年度毎の学生の特質に依存するため、単純比較はできない。ただ、学生の積極的な取り組みを喚起し、満足度の向上に結びつけるための授業改善の取り組みを継続的に実施していく必要性を示唆する結果と言えよう。

一方、学生からの評価の低い項目は、【成果】（目標の知識や能力を獲得できた）と【成績】（成績評価方法について十分な説明があった）であり、高評価はそれぞれ49.3％と42.5％であった。この傾向は昨年までと同様であるが、昨年度よりは若干改善傾向にある。成績評価基準を明確化するなど、近年の取り組みの成果の現れと言えなくもないが、更なる改善努力が求められる。

学生評価と教員評価の比較

学生評価と教員評価の比較を、クラスデータ（学生のSEを元に算出したクラス毎の平均値）とTEとの比較で見たところ、多くの設問で教員に比べて学生が低い評価となっていた。特に、【成績】で顕著（教員の高評価70.3％に対し、クラスデータの高評価はわずか28.2％）であり、その他【主題設定】（同じく92.5％と74.6％）、【説明】（91.0％と81.7％）なども差が見られた。また【時間】（29.4％と7.0％）も差が大きい。これらは、教員が授業中に説明等を行い、実施内容の指示も適切に行ったつもりになっているにもかかわらず、学生には十分に伝わっていなかった可能性を示す結果である。教員と学生が適切なコミュニケーションを図り、学生の理解度を確認しつつ進めていくことが求められると言える。

一方、【バランス】（受講生による議論・調査・発表の部分に対し教員によるテーマの解説部分の時間配分のバランス）については、教員側は4割弱がちょうど良い以外の回答なのに対して、クラスデータによる評価では9割程度がちょうど良いと回答していることがわかる。どの程度解説・講義に当てるべきかは担当教員が苦慮する点の一つであるが、学生からはある程度好意的に受け取られているようである。今後とも、基礎ゼミナールの目的を踏まえつつ、バランスに配慮した授業運営をお願いしたい。

自由記述についての考察

自由記述欄への記述は、学生から延べ341件、教員からは延べ65件であった。昨年は学生が延べ604件、教員が延べ87件であったことを考えると、大幅に減少している。授業の方法論がある程度成熟してきたので特筆すべき意見が減ったのか、アンケートの方法論の問題か、あるいは学生の意欲、積極性、能力の低下を表しているのか、いずれの可能性も考え得るが、原因を注意深く探る必要がある。

学生の自由意見の設問を項目別に見ると、「改めて欲しい点」（131件）、「良かった点」（153件）、「その他」（57件）であった。改めて欲しい点としては、授業の内容に関するもの（内容が専門的で難しすぎた、など）と、授業の進め方（議論、グループワークの時間を増やして欲しい、など）に関するものがあった。これらの自由意見は貴重で参考にすべきものを多く含んでおり、各授業担当者には次年度への改善に生かしていただけると幸いである。それとともに、全体的な傾向を分析して、基礎ゼミナールそのもののあり方や講義の方法論の改善に生かしていく必要があろう。

おわりに

授業評価アンケートの結果からは、基礎ゼミナールは学生の満足度も高く、授業の目的もある程度達成されているように見受けられる。しかし、導入されて数年の未だ発展途上の教科であり、その成否は各担当教員の試行錯誤に頼っているのが実情である。成功事例、要改善事例を蓄積し、担当教員間で共有化し、各教員の授業計画・運営に生かしていく効果的な枠組みを考えていく必要があろう。

都市教養プログラムの改革と授業評価

都市教養プログラム部会長、都市教養学部人文・社会系准教授
沼崎　　誠

本稿では、はじめに今年度からの都市教養プログラムの改革点を述べ、その後、FD委員会と教務委員会・基礎教育部会が実施した2009年度前期における、「都市教養プログラムの授業評価（SE＝学生による授業評価、TE＝教員による授業評価）」の結果について報告する。

【今年度入学生からの都市教養プログラムの変更】

今年度入学生から、都市教養プログラムはシステムの改変をおこなった。昨年度までの入学生は、4つのテーマ（①文化・芸術・歴史、②グローバル化・環境、③人間・情報、④産業・社会）から1つを選び、5つの系（(1)人文・社会系Ⅰ、(2)人文・社会系Ⅱ、(3)技術・自然系Ⅰ、(4)技術・自然系Ⅱ、(5)現場型インターシップ）から4つの系にわたり8単位以上を履修し、後は自由に合計14単位以上履修する必要があった。このシステムは、1つのテーマについてさまざまな領域の学問からのアプローチを学習させるという観点からは望ましいものであったが、学生にとって履修の縛りが強すぎ、語学や専門科目とバッティングしやすく、所属学系（特に専門科目が南大沢キャンパス以外が中心となる学系）によっては履修が非常に難しいという問題があり、学生からも改善の要望が多かった。また、授業提供側にも、非常勤による開講を原則認めず、科目名称にピンポイントなものが多いため、教員の退職やサバティカルによって開講が困難な科目が生じてきてしまうという問題があった。そのため、今年度からは以下の変更を行った。①テーマの縛りを外した。系に関しては、各学部学系によって異なるが、これまでよりも緩やかな縛りとした。しかし、習得の目安としてテーマは引き続き明示しておくとともに、系に関しては人文・社会系と技術・自然系に履修が偏らないような縛りを残した。②「その他の共通科目」を都市教養プログラムに組み込んだ（これらの科目のテーマとして「共通」を設けた）。③一部の科目を開講しやすいよう名称に改めた。

上記変更に伴って、本年度の授業評価からは、これまで授業評価の対象となっていなかった従来の「その他の共通科目」も、都市教養プログラムに組み込まれたため、授業評価の対象となっている。

【調査概要】

調査対象と回収率はTable 1の通りである。ここ2年間の前期調査と比べると、授業数や担当教員数レベルではほとんど変化がないが、履修登録者レベルで見ると、50.5%→48.6%→45.7%と回収率は低下傾向にある。また、都市教養プログラムは他の基礎・教養教育科目に比べて教員の回収率が低いことも問題であろう。

Table 1　調査概要

	対象	回収	回収率
SE 履修登録者(名)	14186	6468	45. 7%
授業数(クラス)	94	84	89. 4%
TE 担当教員数(名)	129	91	70. 5%

Table 2　質問項目（SE）

態度：私はこの授業に意欲的・積極的に取り組んだ
意識：授業の目的を意識しながら学習することができた
説明：教員の説明はわかりやすかった
対応：教員は学生の質問・意見に対して適切に対応していた
時間：授業時間外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？
成績：成績評価方法について十分な説明があった
成果：シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できた
満足：私はこの授業を受講して満足した
ｼﾗﾊﾞｽ：この授業の選択に当たって、シラバスが役に立った
難易度：この授業の難易度は、あなたにとってどうでしたか
視野拡大：この授業を受講して、自分の視野が広がった

SEの質問項目はTable 2に示したとおりである。「シラバス」以降は都市教養プログラムの独自の質問項目である。TEの質問項目は、SEと同一の焦点について、教員の自己評価や学生の態度を観察した評価を尋ねている。回答は「強くそう思う・そう思う・どちらとも言えない・そう思わない・全くそう思わない」から選択し、順に5・4・3・2・1の点を与えた。ただし、

「時間」は「2時間以上・90分程度・1時間程度・30分程度・ほぼ0時間から」、「難易度」は「易しかった・やや易しかった・どちらとも言えない・やや難しかった・難しかった」から選択させた。これら選択式の質問項目以外にも、「この授業で改めて欲しい点」「この授業で良かった点」「授業やカリキュラムについて」の3点について自由に記述させる項目を設けた。

学生データの質問に対する回答の平均値と標準偏差はTable 3の上段に示したとおりである。学生データの比較ため、教員データの各質問に対する回答の平均値と標準偏差もTable 3の下段に示した。ここではSEデータの全体傾向、SEデータとTEデータの比較、自由記述の回答、の順で報告していく。

【SEデータの全体傾向】

回答内容が異なる「時間」「難易度」を除くと、学生の評価の高い項目は、「視野拡大（3.60）」「説明（3.51）」「満足（3.51）」であり。評価の低い項目は、「シラバス（3.14）」「成果（3.17）」「意識（3.25）」である。クロスロード6号で宮台教授が指摘しているように、実質満足に関する項目が高く、シラバス関連項目が低いことは（この結果の解釈についてはクロスロード6号を参照）、これまでの調査と変化はない。

「時間」に関しては、ここ2年の前期調査と比較すると1.35→1.55→1.60とわずかながら増える傾向にあるものの、これまでも指摘されているように、単位の実質化という観点からはまだ不十分と言えよう。

【SEデータとTEデータの比較】

教員の自己評価の高い項目は、「視野拡大（4.19）」「説明（4.14）」「意識（4.08）」であり、評価の低い項目は「満足（3.58）」「態度（3.65）」「成果（3.67）」である。また、学生との乖離が大きい項目は「意識（0.83）」「シラバス（0.66）」「説明（0.63）」「視野拡大（0.59）」である。

学生の評価の高い「視野拡大」と「説明」は教員の自己評価が高いと同時に、乖離の大きな項目になっている。教員が重視をしている項目で学生の評価が高い点は望ましいことであるが、乖離が大きいことも見逃してはならないだろう。

「説明」は教員の自己評価が高いにもかかわらず、学生の評価の低い項目に入っており、乖離も大きい。大規模教室での大人数科目が多いという都市教養プログラムの性質による問題かもしれないが、この点は自覚を持って改善をする必要があろう。

「時間」に関しては、教員自体の自己評価でも学生への要求が低く、ここ2年の前期の調査と比較すると1.79→2.07→1.83となっており、学生との乖離は少ない。これは教員側が学生に時間外学習を課していないことを意味し、昨年度に比べても教員が時間外学習を課していないという自覚もあることを意味している。この点に関しては、教員側の問題が大きいと言えよう。

【自由記述回答から】

学生の自由記述で、改めて欲しい点と良かった点の双方で多く指摘されていたのは、AV機器関連であった。まず、教員がAV機器の使用になれていない点に関して不満が多かった。この点は、教室ごとにAV機器の使用方法が異なっており使用法に関して教員と事務との連携がうまくいっていないといった問題があると思われる。また、パワーポイントを使用している授業に関して、スライドが見にくい、スライドの切り替えが速すぎる、スライドを資料として配付して欲しい、といった改善要求が多い。その一方で、パワーポイントを含めてAV機器の有効利用が良い点として指摘されることも多い。これは、AV機器を授業で使うことが一般化している中で、教員間にリテラシーの格差が広がっていることを示唆している。FDの活動の中で、事務との連携を含めて、教員間のAV機器の使用に関するリテラシーの格差の解消が必要であろう。

【まとめ】

今年度から都市教養プログラムは改革をおこなったが、学生の評価や教員の評価には過去2年間との比較では大きな変化は見られなかった。新しいシステム初年度の調査であり今後の動向を見ていく必要があろう。

Tablel3　学生および教員の各項目の平均値（*M*）および標準偏差（*SD*）

		態度	意識	説明	対応	時間	成績	成果	満足	ｼﾗﾊﾞｽ	難易度	視野拡大
SE	*M*	3.30	3.25	3.51	3.45	1.60	3.38	3.17	3.51	3.14	2.69	3.60
	SD	1.00	0.98	1.03	0.91	0.94	1.04	0.90	1.03	1.02	0.83	0.98
TE	*M*	3.65	4.08	4.14	3.86	1.83	3.81	3.67	3.58	3.80	2.87	4.19
	SD	0.72	0.67	0.71	0.74	0.85	0.88	0.72	0.69	0.80	0.60	0.74

実践英語教育授業評価

評価と今後の課題

英語教育分科会座長、大学教育センター教授

行方　　均

はじめに

本学の1・2年次実践英語教育は独自の教育方針を採用している。

1年生は年度初めにクラス編成テストを受け、その結果に基づいてA・B・Cクラスに分けられ、日本人教員とNSE教員による授業を受ける。

日本人教員による1年次クラスは、英語教育分科会が選定した統一テキストを使用して読解力養成を中心とする授業を行い、学期末に統一テストを行っている。2年クラスは授業内容がReading, Media, Comprehensiveに分かれており、各教員がそれぞれのカテゴリーに応じたテキストで教授し、試験を行っている。

つぎに、NSE教員による授業であるが、NSE教員による授業はベルリッツに委託している。けれどもベルリッツに本学の実践英語教育を「丸投げ」しているということではない。英語教育分科会は授業内容、テキストなどに関してベルリッツと連携を図り、ベルリッツも本学の英語教育方針に則り、実践的な英語授業を行うことを旨としている。NSEによる授業も学期末に統一テストを行っている。このように、本学の実践英語教育はすべての学生に公平に、しかし能力に応じて、適切な学習機会を与えるという理念のもとに行われている。

今回の報告は、学生と教員両方を対象に行った1年生実践英語Ⅰa（過去3年分前期アンケート）と2年生実践英語Ⅱb（過去2年分後期アンケート）に関する評価である。アンケート結果を個別に見ていきながら、本学の今後の実践英語教育の課題を探っていくことにする。

授業評価について

①　本学の実践英語教育の目的・目標は次のとおりである。日本人教員による授業は先述のように読解力養成を中心とする授業であるが、それだけではなく、取り上げられるテーマやトピックをもとに、柔軟な思考力、正確な分析力、自由な連想力、的確な文章構成力、豊富な語彙力を身につけることを目指している。

NSE教員による授業は、使用言語は英語のみの授業で、クラスでロール・プレイ、ディベート、短いプレゼンテーションなどを行うことにより、実生活で十分使える、また応用できる実践的な英語力を身につけることを目標としている。

②　個別質問事項の選定の意図・手続き

1年生も2年生もテキストの「難易度」に関する質問項目が設けられている。これは学生、教員のアンケート結果を参考にしながら、次年度により良いテキストを選ぶ目安にするための事項である。

1年生の「学習貢献」は日本人教員による英語授業が学生にとって今後の英語学習に資するものであるかどうか、教員が学生の今後の英語学習に資するように授業を行ったかどうかを訊ね、今後の日本人教員による英語教育の改善に役立てるためのものである。

2年生の「NSE」は日本人教員による授業内容がNSEの授業でも役に立っているかどうかを訊ねるものである。

③　共通の質問項目（問1～8）の評価結果及びその経年変化に関する所見

問1「態度」：「私はこの授業に意欲的・積極的に取り組んだ」（学生）　1年生は2007年（3.36）、2008年（3.41）、2009年（3.43）であり、ほぼ横這いである。2年生は2007年（3.56）、2008年（3.68）で、若干の伸びが見られる。

「学生はこの授業に意欲的・積極的に取り組んでいた」（教員）　1年生は2009年が3.82と過去3年の中では最も高くなっており、学生の授業態度の向上を示している。2年生も2007年の3.67に比べ2008年は3.86と少し伸びている。

問2「意識」：「授業の目的を意識しながら学習することができた」（学生）　1年生は2007年（3.24）、2008年（3.29）、2009年（3.26）　2年生は2007年（3.61）、2008年（3.71）。「授業の目的を意識しながら学習することを促した」（教員）　1年生4.09～4.11、2年生は4.1～4.12となっており、1.2年生とも教員が思っているほど学生が意識的に学習していないことを窺わせている。

問3「説明」：「教員の説明は分かりやすかった」（学

生）　1年生は2007年（3.31）、2008年（3.59）、2009年（3.58）、　2年生は2007年（3.85）、2008年（3.91）である。

「わかりやすく説明した」（教員）　1年生は2007年（4.06）、2008年（3.92）、2009年（4.36）。2年生は2007年（4.06）、2008年（4.07）である。

1年生に関しては、学生と教員の比率の開きが大きい。したがって、教員は1年生に対するより丁寧な説明が求められる。

問4「対応」：「教員は学生の質問・意見に対して適切に対応していた」（学生）　1年生は2007年（3.53）、2008年（3.79）、2009年（3.68）。2年生は2007年（3.9）、2008年（3.95）である。

「学生の質問・意見に対して適切に対応した」（教員）1年生は2007年（4.11）、2008年（3.96）、2009年（4.42）。2年生は2007年（4.03）、2008年（4.12）である。

ほかの事項に比べて全体的な比率は高いが、1年生の2007年と2009年に学生と教員の比率の差が大きい。教員の側の対応の改善が求められる。

問5「時間」：これは1週間の学習時間を問う事項である。1・2年生ともに少なくとも1時間程度の学習を課した教員に対し、学生の学習時間が短すぎるのが気にかかる。これはテキストの難易度とも関連性があるが、学生は総じて実践英語の学習にあまり時間をかけていないことが表れている。

問6「成績」：「成績評価について十分な説明があった」（学生）、「十分な説明をした」（教員）

英語教育分科会は毎年専任教員、非常勤教員を一堂に会して、ガイドライン説明会を行い、第1回目の授業で成績評価方法について学生に十分な説明をするよう要請し、シラバスにもその旨を載せ、周知徹底を図っている。だが、比率を見ると1・2年生ともに学生の比率が低いので、さらに周知徹底を図る必要があろう。

問7：「成果」「シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できた」（学生）、「獲得させることができた」（教員）

1・2年生ともに、学生の比率が教員に比べてやや低いとはいえ、それなりの成果をあげてきていると言えよう。

問8：「満足」　「私はこの授業を受講して満足した」（学生）、「学生は満足したと思う」（教員）

1年生は学生が2007年（3.19）、2008年（3.09）、2009年（3.3）、教員は年度順に3.42、3.41、3.69となっており、とりわけ2009年の学生と教員の比率に多少の差があるのが気にかかる。2年生は学生が2007年（3.78）、2008年（3.86）、教員は2007年、2008年とも3.6となっており、学生の比率が初めて教員の比率を上回っている。全体に教員の比率に比べて学生の比率が低い中で注目に値する。これは3つの分野に分かれた2年生の英語教育を学生が評価していることの証左の一つといえる。

④　個別質問項目の評価結果とその経年変化に関する所見

「難易度」：英語教育分科会が毎年適切な統一テキストを選定している。1・2年次とも、比率を見ると、2007年と2008年は学生、教員ともに「やや難しい」と「ちょうどよい」の間に収まっているが、1年生の2009年度は「やや易しい」のほうに傾いている。これはテキスト選定の難しさが如実に表れた比率である。英語教育分科会は適当に教科書を選定しているわけではなく、学生の統一テスト成績やテキストに対する学生や教員の意見やアンケート結果を参考にして次年度のテキストを選定しているが、A、B、Cクラス共通の、ベストとは言わないまでもベターなテキストを選んでゆく必要がある。

「学習貢献」：これは1年生の質問項目である。学生の見解（約3.1）と教員の見解（約4.25）との間には大きな開きがあるが、学生の比率を上げる努力が必要であろう。

「NSE」は2年生の質問事項である。これも学生の比率が低いので、教員の側の工夫が求められるかもしれない。

今後の課題

1年生（前期3年間）と2年生（後期2年間）のアンケート調査結果を検証してきた。その結果、1・2年生の実践英語はそれなりの成果をあげてはいると言えるが、高水準で学生と教員の比率が同一レベルになるような努力を今後していかなければならないだろう。それには教員のさらなる努力のみならず、教員の努力に応えるような学生の真摯な学習態度も望まれる。

2009年度前期情報リテラシー実践Ⅰ授業評価報告

情報教育検討部会長、大学教育センター教授
永井　正洋

はじめに

本稿では、2009年度前期末に行った、情報リテラシー実践Ⅰに関しての授業評価アンケート（SE，TE）の結果を報告する。

まず、アンケートの質問項目だが、昨年度と変わっていない。次に回答方法に関しては、2007年度から3年間、eラーニングシステムを用いてアンケートを実施してきたが、SEでのシステム利用のクラスの割合は48.6％（2007年）、89.5％（2008年）、97.3％（2009年）と増加している。また、TEについても44.8％（2007年）、84.6％（2008年）、96.0％（2009年）と増えている。

この授業評価アンケートに先立ち、本年度で4年目となる学生の情報リテラシーに関してのレディネス調査を、4月に実施したが、2009年度も、多くの調査項目（71.4%）で昨年度と比べ伸長が認められた。したがって、学生の情報やコンピュータに関して使えるという意識は、徐々に高まってきていると考えられる。しかし、多くの項目で未だできるという回答が全学生の50%を超えておらず、その意味であまり身に付いていないと学生は認識しているようである。更に、客観テストからは、本学は他11大学の平均と比べ、昨年度と同様、有意に低い得点となっており、基本的な情報リテラシーを欠く状態であることが分かる。

ここで、主に基礎・基本的な情報活用能力の育成をねらっている情報リテラシー実践Ⅰは、標準として、『情報倫理、コンピュータやネットワークの仕組み、e-mail、Web検索、文書編集、表計算、プレゼンテーション』といった学習内容から成り立っている。したがって、前述のような状態で学生のレディネスが2年間あまり変わっていないことを考えると、上記内容は適当であることが推察されるが、本稿では実際、どのように授業が評価されたのかということを明らかにしていく。

方　法

以下の様に授業評価アンケートを実施した。

実施時期： 2009年7月6日～7月23日
学生による授業評価（SE）：
対象： 首都大学東京 情リテⅠ受講者
回収人数／全人数： 1376人／ 1722人（79.9 %）
方法： BlackBoard（38クラス）
　　マークシート（1クラス）
教員による授業評価（TE）：
対象： 首都大学東京 情リテⅠ担当教員
回収人数／全人数： 35人／ 48人（72.9 %）
方法： BlackBoard（24人）
　　マークシート（1人）

結果と考察

図1を見ると、「授業に意欲的・積極的に取り組んだか」という「問1」に対して、2007年からこれまで同様に約7割の学生が肯定的に答えている（5．強くそう思う＋4．そう思う）。しかしながら、「問5」の「授業外」での学習となると、0時間と30分程度の学生が合わせて約76.1％にも上り、あまり学習していないことが分かる（しかしながら、2007年度は85.6%であり改善はみられている）。

次に、「問10」、「問11」の「文書編集」と「表計算」に関しては、それぞれ、61.6％、60.8%の学生が身に付いた（5．強くそう思う＋4．そう思う）と答えており、レディネス調査では、関連項目の多くで5割を超えていなかったことを考えると、授業の効果が現れているといえよう。しかしながら、経年変化を見ると、2007年度は、「文書編集」68.2%、「表計算」63.6%であり2項目の割合は落ちているので、今後、注意して見ていきたい。

「問6」の「成績評価方法について十分な説明があったか」については、肯定的に回答した学生が、40.9％であった。2007年度の割合が35.2％であり、2008年度が41.6%であったことを考えると、2007年度末に情報教育検討部会により策定された、「情報リテラシー実践の成績評価の指針」が、教員の学習評価への注意に若干影響した可能性がある。

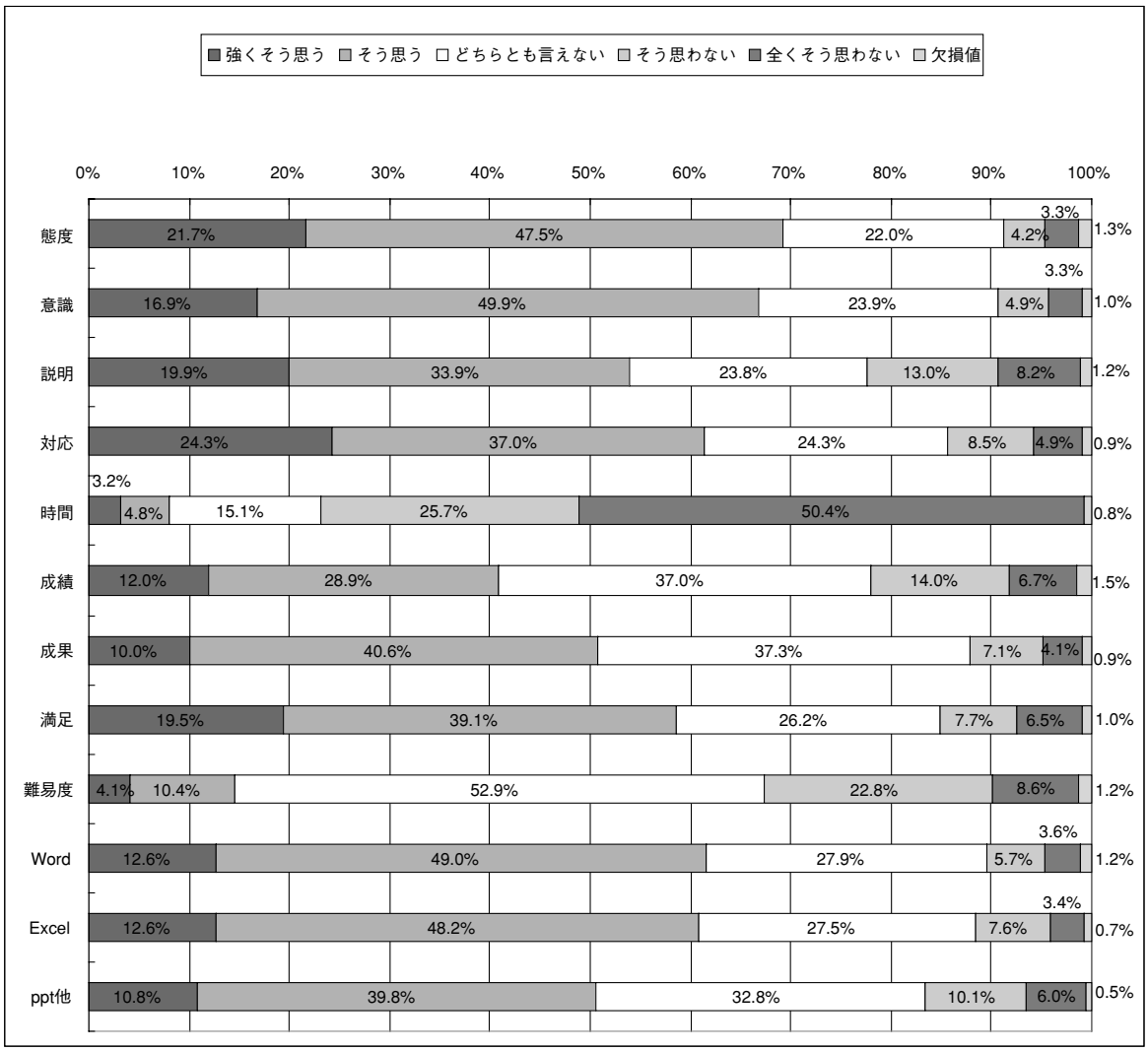


図１：ＳＥ回答の分布

基礎ゼミ	実践英語	情リテ	都市プロ	理工共通	平均
3.86	3.30	3.58	3.51	3.28	3.51

表1：他科目との満足度の比較

最後に、「問9」の「難易度」に関してだが、図1からは52.9%（2008年度53.0％）と半数以上の学生が「適切だった」と答えていることが分かる。また、容易（4. 易しかった＋5. 易しすぎた）だという意識の学生が14.5％であるのに対して、難しい（1. 難しすぎた＋2. 難しかった）と回答した学生が、31.4％であり、難しいと考えている学生の方が倍多いことも分かる。

更に表1から、他科目の中で情報リテラシー実践Ｉは、比較的良い評価を得られているので、学習内容は概ね適切であり例年と同様に、学生に受け入れられていたと推察される。

図2は、TEの項目別平均値である。SEのそれと比較すると、「問9」「難易度」を除く11項目中9項目で、TEの方が高く、教員の方が授業に関して肯定的に捉えていることが分かる。中でも「問6」の「成績」はSE 3.26、TE 3.88と一番差異があり、成績評価方法の伝達に関して前述したように改善は見られるものの、未だ十分でない感がある。

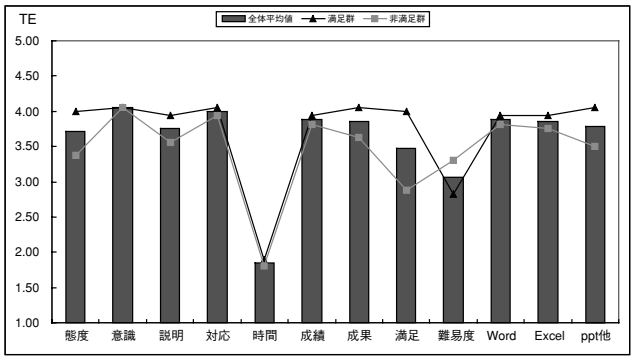


図２：TE項目別の平均値

難しくてもいいのではないか

理工系共通基礎科目の授業評価結果の経年変化と今後の課題

理工学系FD委員会委員長、都市教養学部理工学系教授

田代　伸一

理工系共通基礎科目の課題

理工系共通基礎科目とは、首都大学発足以来、従来の一般教養科目の自然科学系列の科目配置に変え、学生の多様な興味関心に応えることと理工系専門科目の基礎作りの両方をめざして編成された科目群である。科目表を一見すればわかるように実に多種多様な講義、実験等がそろっている。平成21年度前期では64クラスあり、履修学生数は延べで5,031名にのぼっている。受講学生は都市教養学部理工学系、都市環境学部、システムデザイン学部、健康福祉学部の1、2年生である。

この科目群を主要に担当している理工学系では、毎年学生の反応を見ながら授業改善に取り組んできた。困難な点は初めからわかっていた。

元来、専門課程に進んで初めて、その面白さや重要性がわかる、いわば理数系の基礎訓練にあたる学習に学生が意欲を持って取り組めるのは、その先での必要性が十分自覚されるときであろう。この「その先」がまだ見えていない1年生や2年生に専門的学問の面白さをほのめかしながら、あるいは「そのうちわかる！」と言いながらドリル的要素を必須とする訓練をするのは、講義者と同じ領域をめざす学生にはある程度容易である。しかし、進むべき専門課程が多様な学生が混在している大人数クラスでは学生の能力ではなく意欲に大きなばらつきがあり、授業のレベル設定が困難なことは当然である。

とくに、ドリル的要素が不可欠な科目は「例題演習」が重要で、かつて（大昔）は、それをすべて学生の自学自習に任せて、講義ではとくに時間をとって演習をしなくてもよかった。しかし、よく言われる『ゆとり教育』に言及せずとも、「わからない」ことに自責を感じない学生は明らかに増えている。「授業に出ればわかるように教えるのが教師の義務」と考えがちな学生に、もっとずっと不親切な教育で育ってきた教師はとまどってしまう。この学生の状況変化は、前述の多様な専門予備軍の問題をさらに深刻にしている。

外側から進めてきた授業改善

したがって、理工系共通基礎科目の授業改善は、講義手法以前に、どれだけクラスを少人数にして学生に目が届くようにし、演習や宿題を課して否応なしに自習する習慣を付けさせるか、といういわば外側の問題から進める方法をとった。つまり、歴代のFD委員が各期ごとの学生アンケート、教員アンケートの結果を注視し、各コースの教員と図り、教務委員会、事務局と協力してクラス編成の手直しや増加、学年配当の変更、共通教材の整備等教員の個人的な努力では解決できない事項の改善を進めてきたのである。

これらはスタッフ数の制限などがありながらも、現

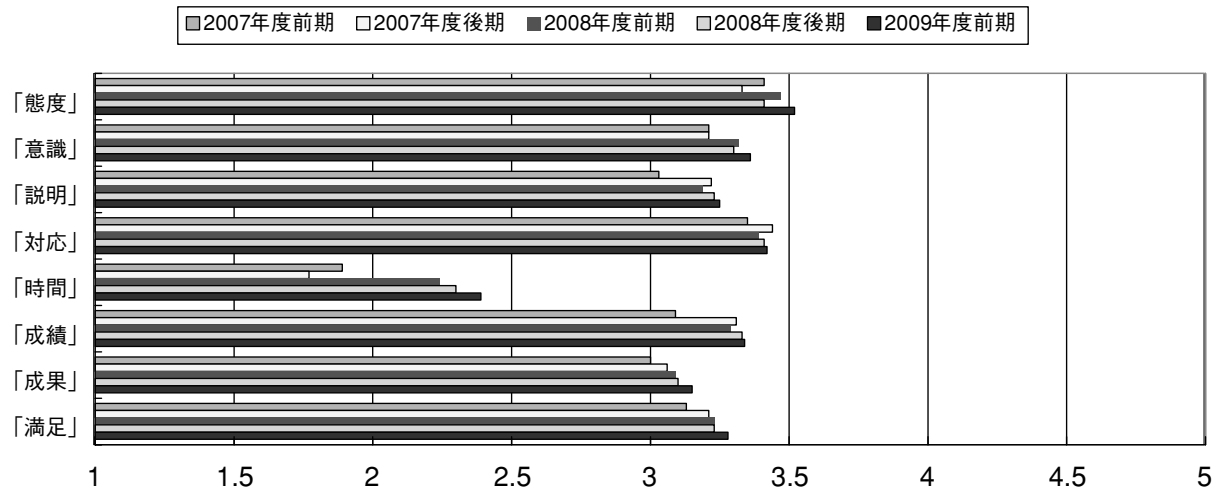


図１　理工系共通基礎科目（学生の評価）

行カリキュラムの3年間でおおよそ一段落し、それ以降は個々の授業で開始当初に授業の目標、成績評価法の周知、宿題の設定や演習的要素の増大など、授業内容の改善の工夫をする段階に来ている。

徐々に前進しているかな？

4年間の1サイクルを終えた現在、図1と図2に示す学生と教員のアンケートの評価の推移を見ると、私たちが進めてきた授業改善の成果と問題点が見えてくる。図1中の「態度」「意識」等の質問の具体的内容は以下のとおりである。

［学生アンケート］

「態度」：私はこの授業に意欲的・積極的に取り組んだ。

「意識」：授業の目的を意識しながら学習することができた。

「説明」：教員の説明はわかりやすかった。

「対応」：教員は学生の質問・意見に対して適切に対応していた。

「時間」：授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？

「成績」：成績評価方法について十分な説明があった。

「成果」：シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できた。

「満足」：私はこの授業を受講して満足した。

［教員アンケート］

「態度」：学生はこの授業に意欲的・積極的に取り組んでいた。

「意識」：授業の目的を意識しながら学習することを促した。

「説明」：わかりやすく説明した。

「対応」：学生の質問・意見に対して適切に対応した。

「時間」：授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習を課しましたか？

「成績」：成績評価方法について十分な説明をした。

「成果」：シラバスに目標として掲げた知識や能力を獲得させることができた。

「満足」：学生はこの授業を受講して満足したと思う。

学生の評価ですぐにわかるのは、ほとんどの項目で（徐々にではあるが）良い方に推移していることだが、注目したいのは、①「時間」項目、つまり自学自習時間がはっきりと増加していること、②「説明」「成果」「満足」の諸項目が着実に高い評価に変化してきていること、である。一方、教員の評価では、「時間」以外はほとんど変化がないことがわかる。つまり、教員側は同じような働きかけ、訴えかけを継続しているのだが、それに対する学生の反応が徐々に変化してきていることの表われではないかと考えている。学生は基本的には同じ授業をとるわけではないが、科目群全体でみれば何度も受講するわけで、1年の時の経験が2年で、前期の経験が後期になって浸透してきた、と考えるのは我田引水だろうか。

とりわけ、「時間」に関しては、嫌がられるのを覚悟の上で宿題を課し、他人の丸写しにため息を吐きながらチェックして返し、講義時間を気にしながら中間テスト、小テストを行なってきた教員の意識的働きかけが実を結んできたと言えるだろう。そして、そのことが学生側の「満足」の低下となっていないことが喜ばしく、また重要である。

「難しさ」をどう考えるか

ただし、大きな問題がまだ厳然としてある。それは、「共通質問」と別に理工系共通基礎科目独自の質問として設定した「問12　この授業の難易度はあなたにとっ

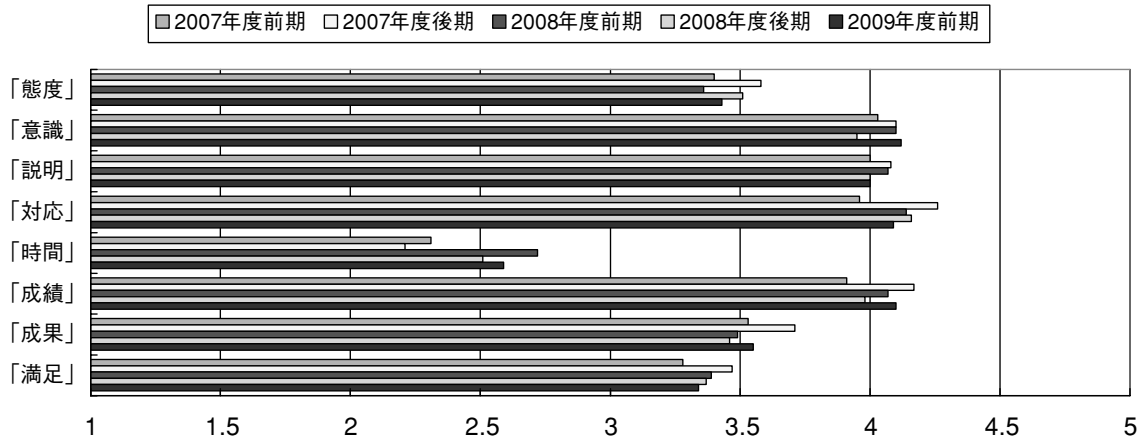


図2　理工系共通基礎科目（教員の評価）

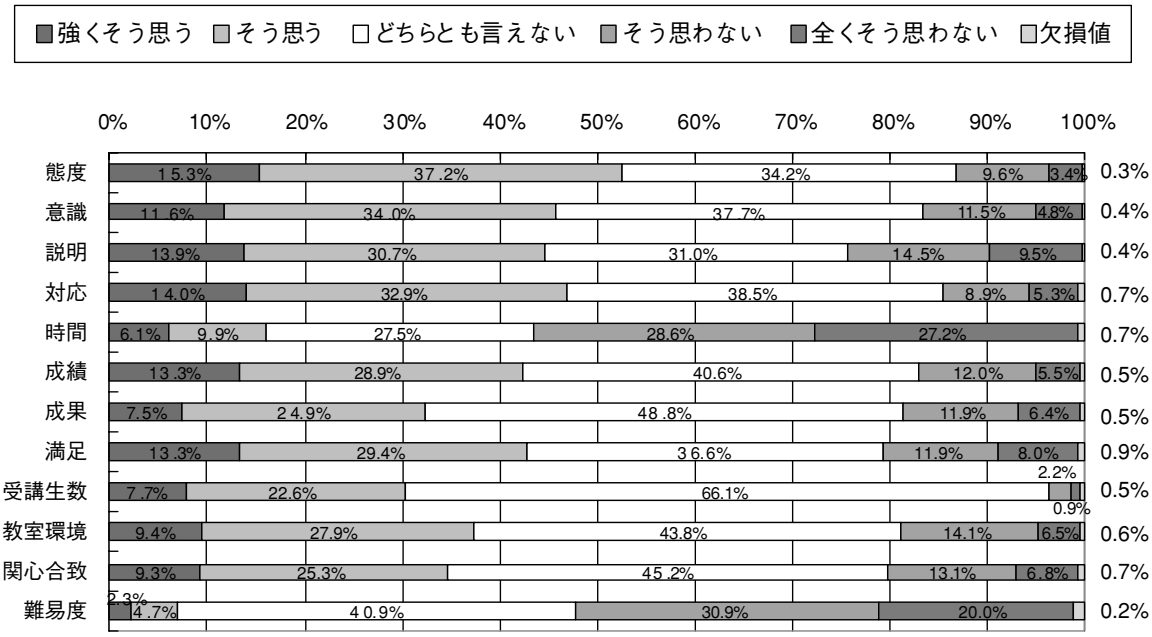


図3　21年度前期理工系共通基礎科目授業評価（学生）

てどうでしたか」という問に対する学生の回答である。

図3には今年度前期の回答分布を示しているが、「やや難しい」と「難しい」とを合計すると、実に50.9パーセントとなり、一方、「易しい」と「やや易しい」の合計はわずか7パーセントにすぎない。この値は昨年の前後期、一昨年もまったく変わっていない。

図は省略したが、対応する教員への質問は「この授業の難易度は学生にとってどうでしたか」というものだが、意外にも回答の分布は学生のものと同じなのである。教員の判断は半期終わった時点での学生の反応をみての回答だから、教員側の判断、評価は実に正確に学生の状況を把握していることになる。

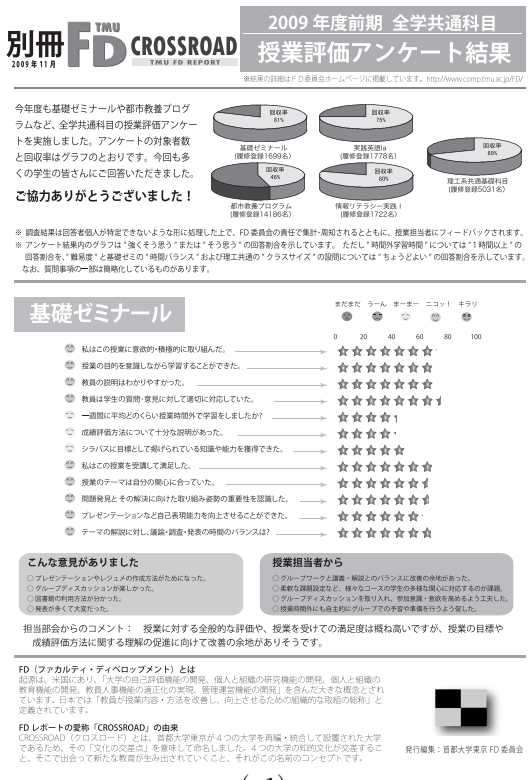
考えなくてはならないのは、教員も学生もともに、やや難しいと思いながら講義し、受講している現状をいかに評価するかである。聞いてみると実際は多くの教員が年々少しずつ講義内容を変え、工夫をしている。しかし学生側の受け止めは基本的に変わらないのである。ここで冒頭に述べた、大学レベルの理数系の教育の抱える本質的な難しさが浮き彫りになってくる。

この問題は理工系のFD委員会でも例年議論になる問題なのだが、現在のところほぼ共通認識となっているのは、今後も教員間で情報や経験の交換を密にしながら教え方の工夫を続けてゆくが、意識的に大きくレベルを下げるようなことはしない。「知ってもらわなければならない知識、スキルはあくまで伝える」姿勢は堅持する、ということである。筆者も個人的には、その姿勢が学生の意識と大きく乖離し、不満が鬱積するようでは目的を達成できないが、幸い、前に述べたように「満足度」は徐々にではあるが上がっていることを励みとして、努力工夫を継続してゆくことの方が長い目で見れば重要なのではないかと思っている。

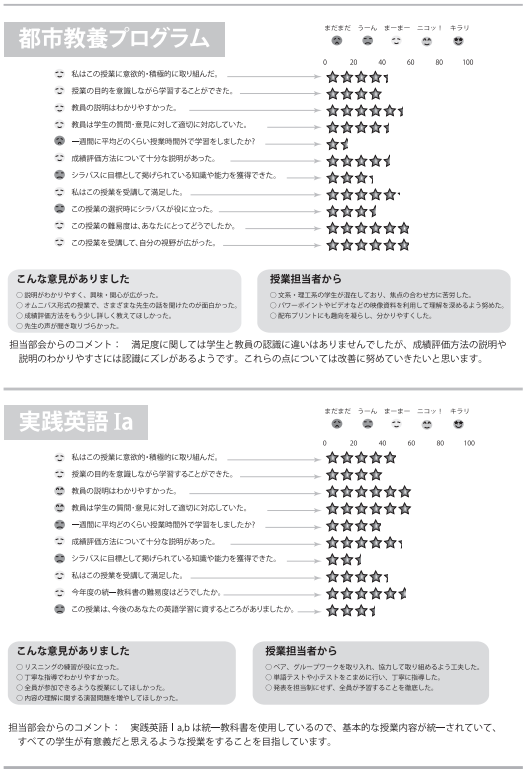
ともあれ、100人を超えるクラスの解消、教員の考える到達目標と学生の達成感をいかに調和させるか、など課題はまだまだ山積みである。

授業評価アンケート集計結果

FD委員会では、授業評価アンケートの結果を学生へフィードバックする手段として、前期実施分の集計結果をまとめたリーフレット（別冊FDレポート『クロスロード』、Ａ３二つ折り）を発行しました。

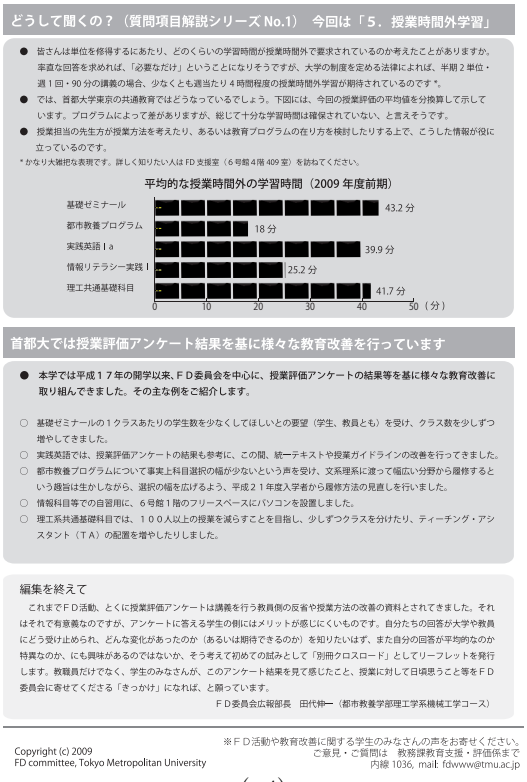


（p1）



（p2）

（p3）



（p4）

「授業評価アンケート集計結果」を見て

都市教養学部人文・社会系心理学・教育学コース3年
金子　美祐

2009年度版の授業評価アンケート結果の中で、特に興味を引かれたのが「学外学習にどれだけ費やしているか」についてだ。本来必要とされている学外学習の時間に比べて実際の学習時間は少ないが、これは「授業への参加意識の低さ」と「単位取得の容易さ」のせいと考えられる。

学生が発言・ディスカッションなどをする機会があまりない授業や、課題などが学期末にしか出されない授業では、内容がわかりやすくても講義を聞き続けるだけの受身姿勢になりがちで、能動的に学習しようという意欲が起こりにくい。また出席点などを加味しない、課題などが少ない授業の場合、レジュメを読んで学期末のテストやレポート提出さえすれば、本来必要とされているであろう分の努力をしないでも単位が取得可能な場合がある。

特に都市教養プログラムの学外学習時間が低いのは、他の基礎ゼミナールや実践英語、専門系科目に比べて「大人数クラスが多い」、かつ「単位取得の難易度が低い授業が多い」からであろう。これにより、授業ひとつひとつにあまり重みがないように感じられてしまい、その分野に関する学外学習の時間も更に短くなる、という負の連鎖が生じてしまう。

基礎ゼミナールは演習や興味のある項目について調査・発表を中心とした形式が多いため、しっかりした事前準備が必要となるので他の科目と比べて学習時間は確保されている。

情報リテラシーに関しては、課題や発表のレジュメ・パワーポイント作成など実践の中で復習も行えるため、敢えて「復習」のための時間としていないため数字に反映されていないと考えられる。

そのほかに「授業に満足した」という項目の点数は高いのに「シラバスに掲げられた能力は獲得できた」という項目の点数が低いという、一見矛盾した結果が気になった。これも、先に述べた「単位取得の容易さ」と関連があるように思う。

「授業への満足」は教員の対応や講義の内容などに関わるもので、「能力獲得」は自分自身の能力に関するものである。講義に不満は無いが、自分から能動的に学習せず、あまり苦労しないで学期末テスト・レポートを付け焼刃的な知識で乗り越えることが可能なため、きちんと知識が身にならず、「能力獲得」ができたとは言いがたいからと考えられる。

また、非常に残念に思うのが、ほとんどの学生がこの「授業評価アンケート集計結果」について存在やその詳細を知らないことだ。自分自身、アンケート結果が担当教員に渡されることは知っていたが、結果が冊子の形で報告され、その結果を受けて、大人数クラスを減らしたりＴＡを配置したりと授業改善の参考に使われていることは知らなかった。解りやすくまとめてあるので、ぜひ必修授業で配布するなどして多くの学生に目を通して欲しいと思う。

学生の立場から見た授業アンケート

ー授業評価アンケート集計結果をみてー

都市教養学部理工学系機械工学コース３年

川原田　雅也

1年生の時から全ての授業で授業評価アンケートを書いてきたが、今回のこの機会があるまでレポートやリーフレットが発行されているとは知らなかった。

学生の立場からしてみれば、授業評価アンケートをじっくり書いていると講義時間や演習問題を解く時間が減ってしまうので、乱雑に書いてしまっているのが現状である。これでは意味がないので、アンケート実施日には授業時間よりも早く教室に来てアンケート用紙を配ったりなんらかの対応を教員側がするべきだと思う。

また、都市教養プログラムや理工系共通基礎科目等の大きなくくりで結果を出しても意味をなさないと思う。このくくりでは、1つのくくりに対して授業数が多すぎであり、学生がこの結果を見て、履修に反映させようとは思わないはずである。一つ一つの授業ごとに結果を出すべきだと思う。

したがって学生にアンケート結果のメリットを与えるには、毎年シラバスに過去3年分程の同じ授業アンケート結果を一部載せるべきだと思う。例えば、｛教員の説明がわかりやすかった｝や｛この授業を受けて満足したか｝などの項目を記載すれば、学生が授業を選ぶ一つの指標にもなると思う。それによって、評価の高い授業は受講人数が増え、逆に評価の低い授業は受講人数が減り、良くない授業が淘汰され、学校全体としてのレベルが上がるのではないかと思う。